人権の窓

共感の輪を広げたい

—〇村公民館長の話より

わたしはＩ養護学校で出会ったＭさんを忘れることができない。被差別部落の出身の彼は、二人の重い障害のある子をもっている。

このＭさんに強い共感を覚えるのは、自分のことを、家族のことを、社会に向けて素直に述べ、訴え、自己のベストをつくして足りぬところは社会に協力を求めている点である。

夕方スーパーへ買物に行くときは、子どもを車いすにのせていく。忙しい時には、「店長さん、この子ここに置いていくでな。たのむぞ。」という具合である。

昼は汗だくで働く。家に帰れば妻と一緒に二人の子の世話をする。高等部を卒業した子どもたちの入浴は男手なしではできない。被差別部落出身のことも、障害のある子どものことも、隠さなければならない何の理由もない。Ｍさんの芯のしっかりした明るく積極的な行動が好ましい人間関係を生み、共感の輪が大きく広がっていく。

彼の長女は福祉関係の仕事に携わる笑顔の美しい娘さんだ。その娘さんが結婚した。夫となった男性がＭさんの家族の実情を知らぬわけがない。すべてを承知のうえで共にくらし前向きに生きている。

二人の姿には、人権感覚を磨きながら互いに喜びや苦しみを共有し、現実の生活をきり拓き創り出している若者を見る思いがする。

これも、Ｍさんの真実の生き方にふれ、その姿に共感し、知らず知らず人としての生き方を学んでいるということであろう。

差別された事実をかくしてひとりで苦しみ、その悲しみを抱いて生涯終えるほどさびしいことはない。差別を受けた人は、その事実を世に出すことが必要だ。まずは私自身からその声を真摯に受けとめたい。

また、『声を出せ』と言われても、これを受けとめ支える雰囲気が周りになければ、真実の声は出てこない。一人一人が豊かな感性を身につける努力をしたい。

部落差別はもちろんのこと、人間として誠実に生きていて人前で馬鹿にされたり、仲間はずれにされるようなことがあってはならない。私のまわりを見れば民生委員さんもいる。その経験者もいる。行政の要職にある人もいる。その経験者もいる。また、何の肩書きもなく言葉も少ないが、真実に生きている人々がいる。この真実の声を大切に共感の輪をひろげたい。